

二条東院造営

——「思ふさまにかしづきたまふべき人も出でものしたまはば」(落標卷)をめぐって——

森 一郎

落標卷の二条東院新築のくだりの中に次の一節がある。

「かやうのついでにも、この五節をおほし忘れず、また見てしかな、と心にかけてたまへれど、いと難き事にてえまぎれたまはず……(中略)……。心やすき殿つくりしては、かやうの人つどへても、思ふさまにかしづきたまふべき人も出でものしたまはば、さる人の後見にもとおぼす。かの院のつくりさま、なかなか見どころ多く、今めいたり」(玉上球彌博士著「源氏物語評釈」第三卷、三〇四頁。以下卷数、頁数は同書による。)

右の文の「思ふさまにかしづきたまふべき人も出でものしたまはば」についてどう考えるべきであるか。古注には「明石の姫君を迎えたら」(細流抄)とか紫上に御子が出来たら、というのがある。紫上に御子が出来たらというのは岩波の日本古典文学大系がそう考えている。「出でものしたまはば」は迎える、すなわち都にお出で

になってそれを迎えるという意にはとれまい。都に出るとは言わず、上る、と言うだろう。「出でものし」を生まれる、とは解せよう。しかし、明石の姫君なら、すでに生まれているのだから、明石の姫君が生まれたならば、とは言えない。紫上に御子ができたら、という解は、源氏が宿曜の予言「御子三人」を信じていないことになるがそれでよいであろうか。予言を信じない光源氏というのは、近代的というか、自ら未来をつくり出す超人的な威勢を感じさせて面白くはあるが、いかがであろう。予言を信じなければこそ須磨にも自ら下った光源氏ではなかったのか。予言通り男の御子お一人は天皇になられ、また、将来、後の位につくべき姫君は生まれている。宿曜の予言は「かなふなめり」(落標。第三卷、二七七頁)と思ひ、「相人のこと、むなしからず」(同上)と思つた光源氏ではないか。予言を信じないとは考えがたい。

また、この物語の世界から考えても、平安時代という時代を考え

ても、予言は信じたと考えるべきであろう。とすると、この宿願の予言に矛盾せず、御子が「出でものしたまはば」を解かねばならないがどう考えるべきか。それは、**養女**である。「出でものしたまはば」は、出現のイメージであり、生まれる。よりも**養女**になるような人が出現したならば、と解すべきでなからうか。「思ふさまにかしづきたまふべき人」は生まれた子でもよいがすでに姫君となつてゐる人でもよいであろう。「かしづく」というのはむしろそうした姫君に対してこそふさわしいであろう。私は、紫上に限らず誰の子であろうと生まれてきた子と解するより、**養女**と解したいと思う。

養女と考える根拠には、この**落標巻**における構想的事実にもとづく私の源氏物語の世界への理解・把握がかかわつてゐる。

落標巻はいかなる巻であるか。言うまでもなく、須磨・明石から帰京した光源氏が政權を得て権勢・榮華の道を歩みはじめた巻である。その構想をおしすすめていくべく光源氏が公私にわたつて着々と手をうつ胸の中は如何。一言にして言えはこうである。彼の流離の悲境に対して信実であつた者に光を与え、彼の輝ける榮光のともづれとしようというのである。

頭中将の榮進はもちろんのこと、將來、政敵たるべきこと当然予想されうるにもかかわらず、その姫君の入内を支持、是認してい

る。もつとも、太政大臣（かつての左大臣）と共存して並び立ち、かつての左大臣派の天下なのだからこの時点で反対の意志表示など出来るわけもなく、また、その気持になれないのであろうけれど、兵部卿の宮の中の君の入内希望に対して支持を与えぬ態度と対照して書かれてあるのを見るとき、光源氏の胸の中は明らかというべきであらう。

しかしながら、光源氏はすべて優位に立たねばならぬ。ところが彼には子供が少ないのである。予言によつて、これは作者自ら定めたことである。頭中将の子供が「いとあまたつきつきに生ひいでつづ、にぎははしげなるを」、「源氏のおとはうらやみたまふ」（**落標**、第三巻、二七〇頁）とあるよう彼はその点についてだけは羨望するよりほかなかつたのである。

源氏は羨望する。しかし羨望するばかりでよいのであろうか。子供が少くないということ、これは將來の政權保持にとつてまことに不利なのである。

玉上博士の「源氏物語評釈」が指摘することく、「源氏のおとは」と、正式の呼び方をしているのは、家の代表者、氏の代表者としての思いである。

光源氏は、左大臣派の政權回復の中で、今、同派の頭中将を敵視しえぬとしても、家の代表者、源氏の代表者としての自覚から未來

についてめぐらすところなくてはならぬであろう。「源氏のおとど、はうらやまたまふ」という一句には、単に羨望しているにとどまらない重いひびきがある。「源氏のおとどは」というのが重いからである。

源氏が、予言に矛盾しないかたちで對抗策を立てるとすれば、
養女、しかないであろう。作者はそれを考えぬであろうか。

二

二条東院は寝殿をあけたままにしてある、と松風巻に書かれるが、その事と前引の落標巻の「思ふさまにかしづきたまふべき人も出でものしたまはば、さる人の……」と関連はないであろうか。

「東の院造りたてて、花散里と聞えし、うつろはしたまふ。西の対、渡殿などかけて、まどころ家司など、あるべきさまにし置かせたまふ、ひんがしの対は、明石のおんかたと思しおきてたり。北の対は、ことに広く造らせたまひて、かりにても、あはれと思して行く末かけて契り頼めたまひし人々、つどひ住むべきさまに、隔て隔てしつらはせたまへるしも、なつかしう、見所ありてこまかなり。寝殿はふたげたまはず、時々渡りたまふ御住み所にして、さるかたなる御しつらひどもし置かせたまへり」(松風。第四巻、六五頁)。

寝殿に住まわせる人を考えるには不利な箇所がある。なるほど寝殿はあけてあるという。が、それは光源氏が時々渡っていくときの

住まいにするというのである。

私はさきに落標巻の「思ふさまにかしづきたまふべき人も出でものしたまはば」というその人は、養女、ではないかと述べた。そして、表現の解釈として注解的思考をめぐらすと同時に構想的状況の中からも源氏が養女を考慮する必然性を述べた。果せるかな源氏に落標巻末に六条御息所の子、前斎宮を養女として冷泉帝に内させようと考え、藤室宮と相談し同意を得ている。とすると、さきに私の言った、養女、とはこの前斎宮を指そうとしていたのかということになるかもしれない。構想的事実からくみあげるとき十分考えられることと思われるからである。しかし、松風巻のこの記事を素直に読むならば、二条東院の寝殿に前斎宮なり誰か高貴の女性を迎える構想があると断じがたい。後にこの斎宮女御は二条東院ではなく二条院の寝殿を住まいとする。源氏一門の代表者として後宮に入内している女御は紫上の上位に遇されている。この、養女、は、紫上より上の格であったわけで、二条東院の寝殿が空いているから誰かを迎えるのみに考えうるとしても、この養女(斎宮女御)ではなかったようである。

かりに二条東院の寝殿に迎えるとしてもその人はこの斎宮女御ではないとすれば、落標巻における「思ふさまにかしづきたまふ人も出でものしたまはば」という人は、私が、養女、と想定したその

人は、どうなるのか。

私は、前引の松風巻のしるすところを正直に受けとって、二条東院の寝殿は源氏が時々渡るときの住まいと考える。つまり松風巻の寝殿をあけたままにしてあるという記事と落標巻の、養女とは関連がないと判断する。

そもそも二条東院造営の目的は何であつたか。斎宮女御のような人をその寝殿に入れるのが目的であつたらうか。そういうことは作者は少しも書いていず、その目的ははっきり書いていない。落標巻に「二条の院の東なる宮、院の御処分なりしを、二なく改めつくらすたまふ。花散里などやうの心苦しき人々住ませなど、思しあててつくろはせたまふ」(第三卷、二七四頁)とあり、また、同じく落標巻に「さるにては、かしこき筋にもなるべき人の、あやしき世界にて生まれたらむはいとほしう、かたじけなくもあるべきかな、このほどすぐして迎へてむ、とおぼして、東の院、いそぎつくらすべきよし、もよほし仰せたまふ」(第三卷、二七七頁)とある。造営の目的は花散里や明石姫君やのためということになる。そして前引の文にあるように五節をも迎え入れたいという。蓬生巻では末摘花を迎え入れている。「二年ばかりこの旧宮にながめたまひて、東の院といふ所になむ、後は渡したてまつりたまひける」(第三卷、四三八頁)。これらの女君は、すべて源氏の須磨退居の折にまつわる人

たちである。私は何よりも造営の目的の第一に花散里を考え、それになつたつて五節を考えると、源氏の思惟に注意したい。この二人は源氏悲境の花散里巻に登場した女性である。源氏が悲境のときになつかしく心によびおこした女性である。源氏の青春を彩つた女君は多かつたはず。物語にそれまで語られていなかった人々の中からこの二人はなつかしく呼びおこされ回想されたのである。悲境の光源氏がとくによびおこした女君。その折の光源氏の心に最も調和した女君であるということが、須磨・明石から帰京後の源氏に紫上についての扱いを受ける最大の理由であらう。

二条東院は実にこの花散里のためにまずは考えられたのである。その事から考えても、二条東院に、花散里を越える上位の人の、御殿(寝殿)入居は考えるべきでないと思う。しからは、「思ふさまにかしづきたまふべき人」とはどういう人か。それは花散里や五節に後見されうべき、花散里の対の屋にひきとられうべき女君で、源氏が「思ふさまにかしづきたまふべき人」である。それはのちの玉璽がまさにイメージとして志向・意図されているであらう。そういう養女をこの二条東院の方には考えていたのではないか。二条東院の方には斎宮女御のようなおもだたい養女を、この気楽な二条東院の方にはそれにふさわしく「思ふさまにかしづきたまふべき人」思う存分な、つまりは斎宮女御のようでなく、もっと気楽に可愛い

がりうるようなあやしくなる。『養女』を考へていたのではあるまいか。

河内木は「かやうの人、つどへすまして、もし、思ふさまにかしづきたまふべき人……」となつてゐる。「もし」の一語は効きすぎで、それでは作者の構想的意図（『玉鬘』を志向する）をのぞかせすぎるであらう。つまり、のちに『玉鬘』が登場したことを知つた者の合理的な連関のさせ方の匂いを木本校訂に感じる。こゝは青表紙本のように、さりげなくほのめかすにとどめてあることこそ真実で、それがかえつて「もし」の假想性を読者におわせるものとなるらう。

私はむろん、『玉鬘』の登場を知る読者である。それで、『玉鬘』というイメージの養女を、斎宮女御と対比しつこの東院に想定できることは否定できない。しかものちに花散里は源氏から、『玉鬘』を託されることも知つてゐるからなおさらである。（もつともこれは六条院においてである。）落標巻で私たちが、『玉鬘』の出現がわかるはずはない。私はそんなことを言つてゐるのではない。作者の構想として、ここにはのかに伏線的に書いたものということと言つてゐるのである。それを、のちの構想の進展を知つてからふりかえつて読者である私が知つた、ということをおうとしてゐるのである。

二条東院に、『玉鬘』を迎へて思うさま大事に可愛がる養女としよ

うとした假想は、六条院の構想に発展した上で六条院物語の女主人公として結実、造型化される。

なぜ二条東院の女主人公として二条東院物語を展聞しなかつたのか。それは二条東院の造営目的が前述したように源氏帰京後、源氏の悲境の折の心の信実あるなつかしくあわれなる女君の入居にあつたからである。ただほのかに一句「思ふさまにかしづきたまふべき人」の出現の假想を示しておいたゆえんである。

養女は、斎宮女御だけでなくもう一人あつても源氏には好都合なること、須磨・明石より帰京後の情況からみて首肯されえよう。

隨月夜への懸想、斎宮女御に対する懸想、源氏中期の恋着は榮華と共にゆたかとなるが、しかし彼自身の分別と相手の側の姿勢によつて事は抑えられていく。『玉鬘』もまた同じであるが、ただその内容が四季の季節感との配合によつてけんらんたる絵巻物の豪華さとなつて結実した。

『玉鬘』は、われわれ読者が思いもつかぬ都の外はるか遠き九州の地から物語の舞台に導入、出現、登場せしめられた。それは落標巻の「思ふさまにかしづきたまふべき人も出でものしたまはば」という假想に対応するものとしてふさわしいものと言えないであらうか。

假想の表現は、あくまで假想の表現としての実質を生きる。され

ば、私は、濔標巻に二条東院物語という、玉鬘を女主人公とする物語の展開が考えられていたなどという、ありもしない話を言わない。

玉鬘は六条院を舞台としての新しい主題に応じて呼ばれた。二条東院に養女が、という構想はあの時点での光源氏の願望、すなわち頭中将に対する羨望と表裏する意識において読みとられるのが最も正しいのであって、それはしかし、のちの玉鬘のようなイメージの人が最もびったりしているということが言えるということなのであった。

そういうわけで、いままで問題にしてきた濔標巻の仮想表現「思ふさまにかしづきたまふべき人も出でものしたまはば」は、濔標巻の時点の、すなわち光源氏帰京後の政治的・恋物語的兩世界にかかわる光源氏の思惟をいみじくも織り込んだ一句であったということになるようである。

〔付記〕 大朝雄二氏の「六条院物語の成立をめぐって——源氏物語の方法についての試論——」（『文芸研究』第五十七集）を拝見し、その好論に共感しつつ別途に私見を述べてみた。前斎宮を情事の対象として云々という論理は好論であるが、そもそも、その間に出来る子供（源氏第四子）を考えることは業上の

子という説と同様、氏が自ら批判しておられるように予言に矛盾するからいかかであろうか。その点、氏の「業上の子」説批判と御論が矛盾するのが残念である。それで、予言外の子を認める立場に立たれたとして拝見したわけである。しかし、私は氏の好論によって別途の論を書いたつもりで、氏の御論の好論なることはうたがいないのである。